

大学生の大学適応に及ぼす攻撃性と強迫性の影響 Affects of aggression and obsession in college students on their adjustment to their college

浅川 潔 司* 古川 雅 文** 竹原 加奈子***
ASAKAWA Kiyoshi KOGAWA Masafumi TAKEBARA Kanako

The present study was designed to investigate how aggression and obsession in students affect their adjustment to their college. Forty-seven male students and 133 female students took part in the study. For measurement of obsession, Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory (MOCI) was used. Aggression was measured by Yoshida, Yoshida and Oguma's aggression scale (1987). Freshmen's Scale for Adjustment (FSA; Yoshida, Suzuki, Kogawa, Asakawa, & Azuma, 2002) was used for measurement of students' subjective adjustment to their college. In the combination of scores of obsession and those of aggression, students were assigned into four groups; that is, High obsession-High aggression, High obsession-Low aggression, Low obsession-High aggression, and Low obsession-Low aggression group. Differences of mean scores in college adjustment were analyzed. Main findings were as follows: (1) No significant correlation was found between obsession scores and aggression scores, (2) High-obsession, High Aggression group showed significantly higher mean scores than low-obsession and low aggression group in sub-scales of FSA, such as academic motivation, depression, and perceived evaluation from others. Those findings were discussed from a viewpoint of school psychology.

キーワード：大学生，環境適応，攻撃性，強迫性

Key words : college students, environmental adjustment, aggression, obsession

問題と目的

近年，学校における不適応が増加している。たとえば，小・中学生の示す不登校もその一つであろう。さらにこの現象は，近年の大学生にも見受けられると小柳（1999）はいう。学歴社会や大学の大衆化に伴い大学進学率が増え続ける一方で，大学生活に不適応感を抱く学生も増えているのである。本研究は，大学生の不適応行動について，彼らの強迫性と攻撃性に焦点をあてて検討することを目的とした。

大学生の不適応として，安香（1992）は，進路上の不適応と心理不適応の2つを挙げている。進路上の不適応では，不本意入学から大学生活に疑問や迷いを生じて馴染めないこと，就職に関する不安から自己分析を経て混乱を生じること，大学に入学したことで目的を失い，戸惑うあげくに五月病に陥ることなどが見られる。心理不適応には対人恐怖やスチューデントアパシーが該当する。鍋田（2004）も同様の見解を示し，現代では軽症型の対人恐怖症が増加しているという。しかし，その特徴はこれまでの対人恐怖症とは大きく違い，弱力性・回避性・

自己像やライフスタイルの形式不全だというのである。つまり，不安や緊張などが起こる理由も曖昧で漠然としており，その対処法として「避ける・こもる」という退嬰的方略をとることが多く，納得のいかないことをコントロールしようと頑張る傾向が少なくなったとしている。

大学生の適応については，伊藤・森田（1995），吉田・浅川・古川・伊都（2003）の実証的研究がある。

伊藤・森田（1993）の研究によれば，目標大学に不合格した結果，仕方なく入学したというような不本意入学において，大学入学後も不適応を呈するものは多く，これは安香（1992）の見解を支持している。また，吉田・浅川・古川・伊都（2003）は，女子大学生の大学適応と気質と性格の効果について検討している。それによると，あまり物事に固執せず，外的志向・他者志向の強い群ほど適応的であるということが示唆された。この研究協力者は女性に限定されていたので，この結果は男女をこみにして一般化できるかどうか興味深い。

ここで，大学適応という概念について考えてみる。まず，東・浅川・古川・吉田（2002）は，大学適応とは大学生と大学という環境が心理的調和にあって，大学から

* 兵庫教育大学第1部（教育臨床講座） ** 兵庫教育大学学校教育研究センター

*** 兵庫教育大学学校教育学部（平成16年度卒業）

平成17年4月20日受理

の要請への適合と大学生の欲求や自発的・創造的な行動が、共に実現される均衡状態のこととしている。また、小柳（1999）は、蓄積された歪みの調整や、時には心の組みかえといった内的適応と、学校へ行く、友人と付き合う、勉強するといった外的適応の調和がとれていることを適応とよんでいる。

これらのことから、本研究では大学適応を、「個人が積極的・能動的に大学環境に働きかけ、自発的・積極的に行動するとともに、大学からの要請への適合も行える均衡状態のこと」とした。

小柳（1999）によれば、近年では大学生の不登校が増加しており、対人恐怖、抑うつ状態、アパシー、摂食障害に陥る学生が増加している。彼はこの背景には、攻撃性の発露の仕方と強迫的傾向が関与するという。

たとえば、対人恐怖は他人のいるところで不安と緊張が必要以上に高まる結果、相手から軽蔑されているのではないかと、相手に不快感を与えているのではないかと気になり、他人を避けようとするものである（Sadock, Grebb, & Kaplan, 1994）。Kraepelin（1915）は強迫観念を分類する際、その一つに恐怖症をいれており、対人恐怖はそれに属するものであり、恐怖症は強迫症状が固定化されたものだとしている。上述のことからすれば、対人恐怖は強迫性がもたらす障害のひとつと考えられよう。

安香（1992）は、青年期前期では自己意識の芽生えとともに他者意識も生じてくるため、対人場面では自分が他人にどう見られているのかという意識が高まり緊張を伴う。その際、自分自身に気になる点があると、そのことを他人に見透かされているのではないかと必要以上に不安が高じてくると述べており、対人恐怖症状に苦しむ多くの学生の特徴として、①自らの症状のために対人関係から身を引こうとしている。②身近な人達との関係が苦痛となり悩みの種となる。③対人恐怖症は青年期前期に始まり長期に及び、男子に発症することが多い、という3つを挙げている。

一般大学生の自覚している対人恐怖傾向の質問紙調査を行った木村（1982）は調査対象者の50.9%が対人恐怖傾向を自覚していると報告している。学部別に見ると、医進課程が44.4%、工学部が49.1%だが、教育学部においては55.3%で他学部よりも多い。さらに一般には、女子よりも男子のほうに対人恐怖が多く見られるといわれているが、この調査では男子が46.9%なのに対し、女子は63.3%と男子よりも女子に多かった。ここでいう対人恐怖傾向とは、視線恐怖、スピーチ恐怖、赤面恐怖、異性恐怖、あいさつ恐怖、醜形恐怖、あがり、人見知り恐怖、表情恐怖などであるが、特に視線恐怖はどの学部においても高率に認められ、次いで、スピーチ恐怖と赤面恐怖も高率であった。これらは、他人からどう思われているのかという不安が根本にあり、それを見透かされて

いると思うことでさらに不安が生じるものである。大学生活ではゼミやサークルなど、顔見知りで身近な人達と接する機会が多く過ごす時間も長いため、対人関係に悩む学生にとっては大学生活への適応がますます困難になると安香（1992）は述べている。

これを裏付けるものとして、川上（2004）、田口（2004）らの研究が挙げられる。

たとえば、川上（2004）は、大学生活不安と個人特性との関連を明らかにしている。彼は、個人特性として達成動機（やる気）と社会的スキル（人間関係の円滑形成）を想定し、大学生活不安との関連を質問紙法によって調査した。その結果、達成動機と社会的スキルが高い群ほど不安は低く適応的であること、逆にこれらが低い群では、不安も高く適応に影響があることがわかった。

また田口（2004）は、大学にいる時の気分や授業態度に影響する要因の研究を行い、良好な友人関係が安堵感を増大させ孤独感を低減させること、良好な友人関係が形成されないと孤独感を増大させ、授業を欠席しがちになる、すなわち不適応状態を招くということを明らかにした。

これらの研究から、目的達成などの積極性や対人関係が大学生活適応に影響を及ぼしているといえる。つまり、強迫性が強くなれば不安は増大し、大学生活の適応において対人関係に支障をきたす、孤独感が増して授業を欠席しがちになるなどの影響を及ぼすことが示唆される。

以上のように、強迫性は、ネガティブな意味で捉えられている。小柳（1999）もまた、強迫性が過度になりすぎるとは不適応の源泉になると述べ、人間関係においては、その性格ゆえに自他の欠点ばかりが目につき、その結果、強迫性が自分に向けられれば劣等感となり、他人に向けられれば批判的となるために、大学生活に支障をきたすというのである。

ところで強迫（obsession）とは、反復的で侵入的な考え・感情・念慮・感覚とされる。たとえば、ものごとを行う際にどうしても数を数えなければ気持ちが悪かったことでもある（Sadock, Grebb, & Kaplan, 1994）。

DSM-IV TR（American Psychiatric Association, 2003）では強迫観念を、「侵入的かつ不適切な性質（自我違和的）で、著しい不安または苦痛を引き起こす（高橋・大野・染矢（訳）」と簡潔にまとめている。正木（1966）は、強迫観念につて、恐怖の事態が不合理でばかばかしいことだとわかっていながら、襲いかかった恐怖から逃れようとしても逃れられず、苦悩、苦痛に苦しめられる状態と説明する。恐怖への予感が意識の緊張を生み、次いで意識的にきわめて緊張した苦痛感、苦悩感をもたらす、そのために精神を消耗する。したがって、現実の社会行動の意識面からしては、強迫観念は異質的意識として本人のひそかな内面的世界に展開する問題であると説

明している。

そこで本研究ではこれらの定義を踏まえて、強迫性を「反復的で侵入的な性質を持ち、恐怖から逃れたくても逃れられないために不安や緊張をもたらすこと」と定義した。

また、強迫性と大学適応の関係について検討した小柳(1999)にしたがい、本研究では、強迫性格を、無駄を排除し、与えられた課題を正確に達成しようとする志向をもち、完全主義や几帳面さや、曖昧さを嫌い、はっきりさせようとする性格特性と捉えることとする。

次に攻撃性について、その包括的な検討を行った大淵(1993)は、一般に、攻撃性は暴力的・破壊的なイメージをもって受け止められがちで、個人は自身が攻撃性など持ち合わせていないと思っていると述べ、実際、攻撃行動の定義を他者に危害を加えようとする意図的行動としている。馬場・福島・小川・山中(1985)は、一般的には破壊的な攻撃性だけが強く意識付けられており、そのイメージから攻撃的なことは悪しきことと感じられ、そのために抑制され、攻撃性をもってするという自覚さえなくなってしまうとしている。しかし、攻撃性は個人が生まれつきもっているものであり、攻撃性の表現には破壊的なものと建設的なものがあり、その方向性を決めるのは個人であるとも指摘する。さらに抑圧された攻撃性はより破壊的なものとなり、“キレル”という形で爆発し、同時に建設的な攻撃性も抑制されてしまうために、攻撃性の肯定的側面までもが影をひそめ、自己主張のない人間が増えていくと述べている。さらに小柳(1999)は、攻撃性が抑圧されると、他者から責められているように感じるうえに、他の感情までもが抑制されるため、生活が平板なものになり、退屈で意欲が減退した生活へとつながっていくとしている。

ところで、破壊的な攻撃性は“怒る・口論する・悪口を言う・いじめる・暴力をふるう・殺人を犯す”などのネガティブなものであり、建設的な攻撃性は“言うべきときに言うべきことを言うなど生存することやその障害となるものを排除し生活領域を確保することや、生きるために不可欠な独立心・自尊心・目標達成・征服欲・知的活動をやしなうこと”などのポジティブなものである。先に挙げた研究の目標達成などの積極性とは、建設的攻撃性の一つの表現型である。また前述したように、困難に対しての回避的対処方法を取り、状況のコントロールに努めない学生が多いというのは、攻撃性の抑圧に伴う建設的攻撃性の低下によるものといえよう。

本研究では、攻撃性を「自分の意見や存在を他者に認めてもらえるように働きかけ、生存するための障害となるものを排除して生活領域を確保するなど、積極性をもち、生産的で建設的なもの」と定義する。

建設的な攻撃性と大学適応の関係を検討した北尾

(2004)は、大学生を対象とし、攻撃性と大学適応感を質問紙法によって測定、両者の関係について検討している。その結果、建設的攻撃性が高い群において、自分が認知している他者からの評価が高いこと、学習意欲が高いこと、友人関係得点が高いこと(友人関係の重要性を感じている)、精神的疲労得点が低いことがわかり、建設的攻撃性が高ければ周囲との関わりが積極的・主体的なものになり、個人の日常生活において、たとえ逆境であっても、生産性を見出し、物事に対してポジティブな意味をもたせるために、大学生活にも適応的であると考察している。また彼は、単なる受身的な状態を適応していることとせず、個々の問題点を真摯に受け止め能動的な働きかけをすることこそが、大学生活を適応的に過ごすうえで重要だとしている。このことから、課題として、大学適応感のみでなく、不登校などの学校現場における適応感を、建設的攻撃性を抱いて生活しているのかも含めて考えていくことをあげている。この研究では、攻撃性のみをとりあげて大学適応感との関係を論じているが、小柳(1999)の見解や川上(2004)、田口(2004)の研究で、現在の学生の大学適応には強迫性が強く影響すると示唆されている。現代において、過度の強迫性は個人の生活や対人関係において不適応を呈すると考えられる。そこで本研究では、個人の強迫性と建設的攻撃性水準が大学への適応感にどのような影響を及ぼすのかという問題に焦点をあてて、検討することとした。

方法

調査対象者 兵庫県下の大学の大学生が本研究に参加した。そのうちわけは、男子50名と女子137名の合計187名であった。そのうち、強迫性尺度、攻撃性尺度、および大学生生活適応感尺度の回答に不備があった男子3名、女子4名を除く180名が分析対象者となった。(有効回答率：96%)

材料 質問紙の構成

本研究で用いられた質問紙は、Maudsley強迫検査(1977)と攻撃性尺度(1987)および大学生生活適応感尺度(2002)から構成されており、その内容は以下の通りであった。

(1) Maudsley強迫検査

Hodgson & Rachman (1977) による Maudsley Obsessional-Compulsive Inventory (MOCI) が邦訳されたものを使用した。本尺度は30の質問項目で構成されており、下位尺度として「確認」、「清潔」、「優柔不断」、「疑惑」が設定されていた。なお、被検査者が取り組みやすいように語尾を変更した。「はい(1点)」「いいえ(0

点)」の2件法によって回答が求められた。全体得点は逆転項目を逆転した後に合計され、その範囲は1～22点であった。強迫性が強いほど高得点であった。

(2) 攻撃性尺度

吉田・吉田・小熊(1987)の作成によるものであった。本尺度には攻撃性の意図および攻撃性の向かう対象の次元を持つ44項目が含まれていた。22の質問項目が建設的攻撃性についてであり、残りの22の質問項目が破壊的攻撃性についてのものであった。「とても当てはまる(4点)」「やや当てはまる(3点)」「あまり当てはまらない(2点)」「全く当てはまらない(1点)」の4件法によって回答が求められた。その範囲は、建設的攻撃性が20～56点で、破壊的攻撃性が20～70点である。攻撃性が高いほど高得点となった。

(3) 大学生生活適応感尺度(2002)

吉田・鈴木・古川・浅川・東(2002)がBaker & Siryk(1984)によるFreshman Scale for Adjustment(FSA)を邦訳したものを、大学生の学内を主とした日常生活の適応感を測定するために用いた。本尺度は28項目で構成されていた。なお、本尺度は学科内に限定した質問項目が多かったが、大学生生活を広く捉える目的で「大学内」と変更した。「とても当てはまる(4点)」「やや当てはまる(3点)」「あまり当てはまらない(2点)」「全く当てはまらない(1点)」の4件法によって回答が求められた。全体得点は逆転項目を逆転した後に合計され、その範囲は46～100点であった。大学生生活に適応しているほど高得点である下位尺度(第1因子・第3因子・第4因子)と、低得点ほど適応的な下位尺度(第2因子)から構成されていた。

手続き

休憩中に、調査者が個人調査事態において、それぞれの被調査者に、趣旨の説明と調査協力を依頼し、質問紙の冊子を配布し、記述を求めた。質問紙の表紙には調査全体の教示と、性別、学年についての質問が印刷された。回答時間は、個人差はあるが約15分間であった。冊子は回答終了後に調査者によって回収された。

結 果

本研究の手続きに従って得られた資料は、以下の手順で分析された。

建設的攻撃性と破壊的攻撃性

まず、建設的攻撃性の合計得点が求められた。その範囲は20～56点であり、平均得点は38.55、標準偏差は6.98であった(Table 1 参照)。

さらに建設的攻撃性が大学適応感に及ぼす影響を検討する目的で、合計得点が平均値以下の低群と平均値以上の高群の2群に分けられた。その内訳は、低群が94名、高群が86名であった。

また、同様に破壊的攻撃性の合計得点も求められた。その範囲は、20～70点であり、平均得点が38.77、標準偏差が9.90であった(Table 1 参照)。

次に、建設的攻撃性と破壊的攻撃性の偏差積率相関係数が求められた。その値は.348であり、建設的攻撃性と破壊的攻撃性は中程度の正の相関関係にあり、両変数は共変関係にあるといえる。

Table 1 建設的攻撃性と破壊的攻撃性の平均値と標準偏差及び相関係数

	建設的攻撃性	破壊的攻撃性
平均値	38.55	38.77
標準偏差	6.98	9.90

建設的攻撃性と破壊的攻撃性の相関係数 $r=.348$

強迫性と建設的攻撃性

次いで、強迫性の合計得点が求められた。その範囲は、1～22点であり、平均得点は8.49、標準偏差は4.04であった(Table 2 参照)。

次に、強迫性が大学生生活の適応に及ぼす影響を検討する目的で、合計得点が平均値以下の低群と、合計得点が平均値以上の高群の2群に分けられた。そのうちわけは、低群が101名、高群が79名であった。

建設的攻撃性については上記で求めた通りである。

強迫性と建設的攻撃性の相関係数が求められた。その値は.146であり、強迫性と建設的攻撃性の間には明確な相関関係は見られなかった。この点で、強迫性と建設的攻撃性は独立しているといえる。

Table 2 強迫性と建設的攻撃性の平均値と標準偏差及び相関係数

	強迫性	建設的攻撃性
平均値	8.49	38.55
標準偏差	4.04	6.98

強迫性と建設的攻撃性の相関係数 $r=.146$

強迫性と建設的攻撃性が大学生生活適応感に及ぼす影響

大学生生活適応感尺度は既に信頼性と妥当性が検討されており、本調査ではデータが少ないため、吉田ら(2002)の因子分析に従い5因子を抽出したが、本研究のデータでは第5因子の信頼性が低かったため、考察を省くこととした。上記で示した通り、強迫性と攻撃性は独立的な関係であることが確認されたので、両変数の得点の平均値を基準とし、それより高い群と低い群に分類

して、Figure 1 のように、4つの象限に群分けした。

Group 1～4 ごとに、大学適応感の平均得点と標準偏差を算出し整理したものが、Table 3 である。

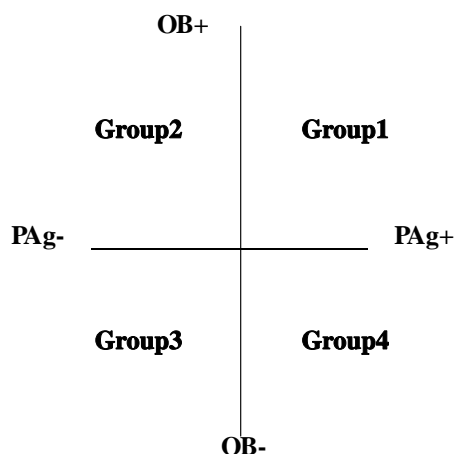


Figure 1 強迫性と攻撃性による群分け

次に、これら4群の平均得点間の差異を検討するために、一元配置分散分析が行われた。

大学生生活適応感の全体得点に関して有意差は認められなかったが、第1因子（他者からの評価）において有意な群間差の傾向（ $F=2.500$, $df=3/179$, $p<.10$ ）がみられ、第2因子（抑うつ感）において、顕著な群間差（ $F=5.155$, $df=3/179$, $p<.01$ ）があることがわかった。また第4因子（学習意欲）においても、有意差（ $F=4.894$, $df=3/179$, $p<.01$ ）が生じていたが、第3因子の対人関係においては、有意な群間差はみられなかった。

次に、下位分析をTukeyのHSD法（ $p<.02$ ）の多重比較により行ったところ、第2因子（抑うつ感）でGroup 1 < Group 3 の関係において有意な差が見られた。これは、Group 1 よりもGroup 3 のほうが抑うつ感が強く、適応的ではないということである。また第4因子（学習意欲）においても Group 2 < Group 1 及び Group 2 < Group 4 の関係において有意な差が見られた。つまり、Group 2 よりも、Group 1 において、またGroup 2 よりもGroup 4 において学習意欲が高く、大学生活にも適応的であるということである。しかしながら、下位分析の多重比較においては、第1因子の他者からの評価においてグループ差は認められなかった。

考 察

建設的攻撃性と破壊的攻撃性について

大学生の建設的攻撃性と破壊的攻撃性の相関係数を調査したところ、正の相関があることがわかった。このことにより、馬場・福島・小川・山中（1985）が述べたように、個人によってその表現や方向性が違うだけで、建設的攻撃性と破壊的攻撃性の源は同じであるということが言える。

強迫性と建設的攻撃性の関係性について

強迫性と建設的攻撃性の相関係数を調査したところ、両変数の間に相関は見られなかった。このことにより、強迫性と建設的攻撃性には共変性はなく、互いに独立した関係にあるといえる。したがって、両変数と大学生生活適応感との関係性を検討することには意味があると考えられる。

強迫性と建設的攻撃性が大学生生活適応感に及ぼす影響について

強迫性と建設的攻撃性それぞれの低高群をもとに分けた4群と、総合的な大学生生活適応感及び、大学生生活適応感の4つの因子についての考察をおこなった。

本研究では、強迫性と建設的攻撃性と大学生生活適応感についての仮説として、強迫性が弱く建設的攻撃性が強い人が最も大学生活に適応的であり、強迫性が強く建設的攻撃性が弱い人は最も適応的でないとしたが、総合的な大学生生活適応感及びそれぞれの因子について、本研究の調査結果から、強迫性が強く建設的攻撃性も強い群が最も大学生活に適応的であることがわかった。したがって、本研究からは、小柳（1999）の見解や川上（2004）や田口（2004）の研究結果から示唆された、強度の強迫性が大学生活上の不適応を呈するという見解とは一致しなかった。これは、研究協力者の在籍校が教育大学ということで、肯定的に受け止められる環境であったことが影響した可能性もある。すなわち、強迫性格のもつ几帳面さや完全主義、建設的攻撃性の自己主張や積極性が教育大学の生活において、種々の側面で必要とされているためではないかと考えられる。また、建設的攻撃性が強いことで、不安や緊張を、生存するにあたっての障害とみなしうまく処理することができ、逆に、行動や判断を

Table 3 グループ別にみた大学適応因子の平均点と標準偏差

	F1	F2	F3	F4	Total
群	他者からの評価	抑うつ感	対人関係	学習意欲	
Group1	15.46 (3.42)	8.39 (3.04)	19.59 (2.91)	13.49 (3.18)	74.76 (11.43)
Group2	13.42 (3.08)	10.13 (3.07)	18.66 (3.43)	11.05 (2.15)	70.24 (10.06)
Group3	14.05 (3.68)	10.59 (2.68)	18.84 (3.00)	12.39 (3.08)	72.96 (10.37)
Group4	14.73 (3.84)	9.11 (3.13)	18.24 (3.59)	12.98 (3.24)	72.44 (13.65)
F値	2.50 ⁺	5.15 ^{**}	1.27	4.89 ^{**}	1.04

注) **: $p<.01$, +: $p<.10$

行う際の慎重さという生産的なものとして、ポジティブに捉えることができているとも考えられ、この結果は、北尾（2004）の、建設的攻撃性が強いことは、たとえ逆境であっても生産性を見出し、物事にポジティブな意味をもたせるという見解を支持する。一方、強迫性のみが強く、建設的攻撃性が弱い群がもっとも不適応を呈していたのは、建設的攻撃性が抑圧されると、他者から責められているように感じる（小柳，1999）、強迫性が強いためにその被害観念が増すばかりで、それをうまく処理することができないということが考えられる。この群及び他の建設的攻撃性が低い群において、第1因子の他者からの評価得点が低かったことから、小柳（1999）の見解は支持できる。

次に、大学生活適応感と4つの下位尺度についてであるが、第1因子の他者からの評価では、強迫性が高く建設的攻撃性も高い人が最も得点が高く適応的であることが示唆された。第2因子の抑うつ感については、強迫性が高く建設的攻撃性も高いGroup 1の人は抑うつ感が低く、その逆にある強迫性が低く建設的攻撃性も低いGroup 3の人は、抑うつ感が高いという結果が得られた。これらの結果から考えられることは、強迫性が高く建設的攻撃性も高い人は、大きな不安や緊張でもうまく処理することができることに加え、積極性もあり自己主張もできるために他者からの評価も高いという意識を持っており、自分に自信があるということからストレスをあまり感じず、抑うつ感も低くなると考えられる。逆に、強迫性が低く建設的攻撃性も低い人は、前述したように、他者から責められていると感じるうえに、積極性や自己主張に欠けるために、納得のいかないことでも他人に合わせるといった受身的な態度からストレスを感じやすく、さらにそのストレスをうまく排除できないために、抑うつ感が高いということが考えられる。

また、強迫性が強く建設的攻撃性も強いGroup 1の人は学習意欲が高く、強迫性は強いが建設的攻撃性が弱いGroup 2の人は、学習意欲が低いという結果が得られ、両者の間には有意な群間差が生じていた。この結果から考えられることは、強迫性が高く建設的攻撃性も高い人は、将来のために自分に必要な知識をきちんと身につけなければならないというように、不安や緊張感をもつ一方で、知的活動を養おうとする意欲が高く、学ぶことへの好奇心も強いために、学習と自分の将来を結びつけ、学習に生産的なものを見出しているために、学習意欲が高いと考えられる。これは、北尾（2004）の見解と一致する。また、無駄を排除し要領よく学習を進めることができるために、意欲も高まるということも考えられる。そして、強迫性は強いが建設的攻撃性が弱い人において学習意欲が低いのは、やらねばならぬとは思いつつも、その実行に当たって積極性を欠く為、学習に対する意

欲が低いと考えられる。この結果は、建設的攻撃性が低いと、退屈で意欲が減退した生活へつながるという小柳（1999）の見解を支持している。

さらに、学習意欲においては、Group 2は強迫性が低く建設的攻撃性が高いGroup 4の間にも有意な群間差をもっていた。この群においては、強迫性が低く、与えられた課題などを必ずこなさなければならないという意識は低い。したがって、積極的な性格傾向にあっても、学習そのものに対する意義を自らの裡に設定できない以上、学習への関心も昂揚しないと思われる。

総合的には、大学生生活を、受動的なものではなく自発的・積極的に行動し、大学からの要請への適合も共に行える均衡状態と考え、与えられたことを適切にこなすことや、不安や緊張といった、受動的に働きかけるものや積極性に欠けるネガティブな部分、また、自己主張やみずから進んで物事をすすめるといった、能動的に働きかけるものや自発性などのポジティブな部分に、建設的攻撃性が、ネガティブなものにポジティブな意味を見出したり、ポジティブさをさらに増大させたりというように働き、その均衡状態を保っていると考えられる。

まとめと今後の課題

今回の研究では、大学生活適応感に影響を及ぼす強迫性と建設的攻撃性の効果について検討した。

その結果、強迫性が相対的に強く建設的攻撃性も同様に強い群が最も適応的であり、他者からの評価も高いと感じ、抑うつ感が低く、学習意欲も高いということがわかった。換言すれば、この結果は生真面目で、積極的である学生ほど、適応的であることを示唆している。

本研究では、攻撃性得点と強迫性得点に基づいて、学生を4群に分けた。すなわち、①不安や緊張をうまく処理し、それをポジティブなものに変え、積極的・意欲的な、向上心をもった学生群（グループ①）、②意欲的ではないが、与えられた課題はきちんとこなすという、受動的な学生群（グループ②）、③自己主張もせず、他者に追従するばかりで、強いストレスを感じながらもそれを自力で改善しない無気力な学生群（グループ③）、及び④与えられた課題をきちんとこなすという正確さには欠けるが、興味のある学習に対しては意欲的になるといった、選択的に意欲的な学生群（グループ④）である。

高強迫性・高攻撃性群がより高い適応感を示したことは、本研究の調査協力者が、教育大学の学生であったということとも無縁ではなからう。将来は教育者を目指すということが全面的に主張される環境そのものが強迫的ともいえるので、より強迫傾向を持った学生のほうがなじみやすいとも考えられる。このことは、将来の目的が明確な目的大学の場合、強迫性水準が高く、攻撃性も高

い学生のほうが適応しやすいことを示唆しているのかもしれない。しかし、この点に関しては他種の目的大学の調査を加えて更に検討すべきであろう。

引用文献

- American Psychiatric Association 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳） 2003 DSM-IV TR－精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 安香宏 1992 適応障害の心理臨床 金子書房
- 東紀美子・浅川潔司・古川雅文・吉田幸世 2002 女子青年の大学適応に関する研究 神戸女子大学文学部紀要第35巻, 161-179.
- 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕 1985 攻撃性の深層 有斐閣
- Hodgson, R. J., & Rachman, S. 1977 Obsessional-compulsive complaints. *Behaviour Research & Therapy*, 15(5), 389-395.
- 伊藤美奈子・森田陽子 1995 平成4年度神戸国際大学生における大学不適応に関する一考察 神戸国際大学紀要48号, 41-58.
- Kraepelin, E. 1915 *Ein Lehrbuch für Studierende und Ärzte*. Achtevollständig umgearbeitete Auflage. 遠藤みどり・稲浪正充訳 1989 強迫神経症 みすず書房
- H. I. カプラン・B. J. サドック・J. A. グレブ（編）井上令一・四宮滋子（訳） 1999 臨床精神医学テキスト－DSM-IV 診断基準の臨床への展開 メディカル・サイエンス・インターナショナル (B. J. Sadock, J. A. Grebb, & H. I. Kaplan (Eds.) 1994 *Kaplan and Sadock's synopsis of psychiatry: Behavioral sciences clinical psychiatry*, (7th edition))
- 川上正浩 2004 大学生活に対する不安について (1) 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, p.158
- 木村 駿 1982 日本人の対人恐怖 勁草書房
- 北尾勇一 2004 (未公刊) 大学適応に及ぼす大学生の建設的攻撃性の効果 平成15年度兵庫教育大学卒業論文
- 正木 正 1996 強迫観念 大日本図書
- 鍋田恭孝 2004 対人恐怖の今日的課題 臨床精神医学 33(4), 363-370.
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心－攻撃性の社会心理学－サイエンス社
- 小柳晴生 1999 学生相談の「経験知」－大学における心理臨床－ 垣内出版
- 田口雅徳 2004 大学生・専門学校生の「学校にいる時の気分」「授業態度」に影響する要因の検討 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, p.444
- 吉田昭久・吉田信仁・小熊 均 1987 現代青少年の心理ダイナミズムの特徴 [II] 茨城大学教育学部教育研究所紀要19号
- 吉田幸世・浅川潔司・古川雅文・伊都紀美子 2003 女子大学生の大学適応と気質と性格の効果（影響）に関する心理学的研究 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, p.233.
- 吉田幸世・鈴木啓嗣・古川雅文・浅川潔司・東紀美子 2002 女子大学生の大学適応と将来展望に関する研究 (1) 日本進路指導学会第24回研究大会発表論文集, pp.22-23.